福井大学リポジトリ
UNIVERSITY OF FUKUI REPOSITORY

俳句にみる留学生のキャンパスライフ―「日本事情B(社会と文化)」のクラスから―

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2013-11-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 今尾, ゆき子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/7996

俳句にみる留学生のキャンパスライフ

―「日本事情B（社会と文化）」のクラスから―

第10（留学生共通教育）部会長　留学生センター　今尾　ゆき子

副専攻科目A群第３分野「文化」の「日本事情B」（社会と文化）を担当して9年になります。受講者は学部留学生、短期プログラム留学生、日本語日本文化研究生などで、日本の年中行事やしきたりを通して日本の社会構造や文化、日本人の価値観を学んだり、県立歴史博物館、市立郷土歴史博物館などの見学や参勤交代衣装の着付け、牧島荘での「かるた競技」、「俳句会」などの体験をしています。ここでは、留学生が初めて俳句作りに挑戦したその成果から20句を選んで紹介したいと思います。五・七・五の17音と季語を簡単に説明しただけの無季、季重なり、字余りなど何でもありの句作りです。そんな「自由俳句」ですが、福井での留学生活や若者ならではの心模様が率直に詠み込まれています。福井大学における彼らの春夏秋冬をどうぞご覧下さい。

◆ 福井の留学生活　―春・夏・秋・冬― ◆

春。大学生活は入学式から始まります。身も心も桜色に、うれしさ一杯の入学もあれば、疎遠になった彼女のことを引きずったまま福井大学に入ってきた人もいます。

- 入学式　心も服も　さくらいろ（中国　女子学生）
- 彼女から　メールとだえて　入学す（マレーシア　男子学生）

授業開始。1年生は１限目の共通教育科目が多いのです。本当に忙しい。

- 一限目　朝ご飯ぬき　ばたばたと（ベトナム　女子学生）

暖かな午後ともなれば、睡魔は容赦なく襲ってきます。

- はらはらと　桜吹雪いて　夢うつつ（中国　男子学生）

夢を抱いて入ったものの全て期待通りというわけには。春愁まっただ中。

- 春が逝く　最初描いた　甘い夢（中国　男子学生）

ここで気分を変えて、ほんわかとした春の恋の句をひとつ。

- 初恋は　霞に迷った　夢みたい（アメリカ　女子学生）

夏。夏休みの前には期末試験が立ちはだかります。花火どころではありません。

- 試験勉強　窓に花火の　輪が開く（中国　女子学生）

花火を見て禁煙を決意した人も。「おもしろうて、やがてさびしき」の心境でしょうか。

- 吸い殻は　花火の終わり　禁煙す（中国　男子学生）

ついでに、タバコがやめられないでいる人の苦い恋の句を。

- 燃え尽きた　たばこ見つめる　恋の灰（ベトナム　男子学生）

秋。秋は寂しさが増す季節。遠く離れている家族へ思いはつのります。望郷の句をふたつ。オリンピック開催に湧くふるさと北京では、みんなどうしているかしら。

- 父と母　会いたいけれど　忙しい（中国　男子学生）
- 北京（ぺいじん）は　オリンピックの　夢の中（中国 2008年度 女子学生）

勉学の秋でもあります。学業は佳境に。毎週の課題レポート、日本語で書かなければ。

- 勉強に　つぶされそうな　夜長かな（中国　男子学生）

冬。冬だからこそピシッと。高村光太郎の詩みたいな元気印の句です。

- 冬が来た　寒さに負けず　がんばろう（マレーシア 男子学生）

とはいえ、バイトで疲れて帰る夜道はつらいものです。まして、冷たい雨の日は。

- 夜の道　バイト帰りの　初時雨（中国　女子学生）

留学生は冬の日本家屋の寒さを「外の温度と同じ」とよく言います。帰宅後しばらくは首だけ出してこたつの中へ。同一作者による「バイト連句」から抜粋。

- 雨に濡れ　ふるえて帰る　バイトの夜（中国　男子学生）
- すぐ着替え　こたつに入り　亀になる（同上）

地球温暖化ですが福井はやはり雪国。とりわけ南の国から来た留学生には厳しい季節。

- 一週間　雪降り続き　たまらない（ベトナム　男子学生）

寒い夜は、なおさら人恋しいもの。みんなで鍋でもつつくとするか。

- 僕のそばに　君がいない　冬の夜（マレーシア　男子学生）
- 寒い冬　何を食べよう　やはり鍋（中国　男子学生）

いろいろあったけど、来年はきっといいことが。最後は、ひたすら前向きの句で。

- 大晦日　世界のみんな　希望持つ（ドイツ　女子学生）

勉学に追われる日々を詠んだ句や望郷の句。そして恋の句。どれも一所懸命で、そのひたむきさにエールを送っている自分がいます。失恋の句、しんどいバイト生活を詠んだ句、つらいため息が聞こえてくるような句でさえも、なぜか明るくきらきらしていて、いけないと思いつつ微笑んでしまうのは私だけでしょうか。